会　議　録

1　会議名

第2回上越市地域福祉計画策定委員会

2　議題（公開・非公開の別）

⑴　挨拶（公開）

⑵　議事（公開）

ア　地域福祉計画における基本理念及び基本目標について

イ　意見交換

3　開催日時

平成30年8月9日（木）　午後3時から午後4時30分まで

4　開催場所

市民プラザ多目的学習室

5　傍聴人の数

なし

6　非公開の理由

なし

7　出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

・委　員：青木委員長、井部副委員長、小杉委員、山川委員、西澤委員
宮本委員、横尾委員、五十嵐委員、仲田委員、藤枝委員、廣川委員
飯田委員、中村委員
（欠席：佐藤委員、片海委員）

・事務局：八木健康福祉部長
福祉課　渡辺課長、福田副課長、星野副課長、高橋係長、阿部主任

・オブザーバー：細谷高齢者支援課副課長、北島健康づくり推進課長
森田地域医療推進室副室長、小松国保年金課係長
坂井保育課長、南雲すこやかなくらし包括支援センター所長
駒澤こども発達支援センター所長

8　発言の内容　（要旨）

⑴　挨拶

⑵　議事

ア　地域福祉計画における基本理念及び基本目標について

・資料に基づき事務局説明

イ　意見交換

仲田委員：　全体として具体性がないと感じた。他人のために果たす出番とは何なのか、居場所とは何を指すのか、地域の範囲はどこまでを指すのか、コミュニケーションとは何か、この辺りのことをしっかり定義付けすることが必要なのではないか。

また、市民の声アンケートにおいて、近所付き合いの理想と現実にギャップがあるとのことだが、なぜギャップがあるのか、委員会の中で議論したいと考えている。

藤枝委員：　全体を通じて理想であると感じた。自分は、地域の老人会に所属しているが、人から声を掛けられても、老人会の活動を嫌がる人も多い。そうした人達の意識を変えるためにも、具体的な目標を定め、社会全体を変えていく必要がある。

廣川委員：　大島中学校では、中学生が地域を元気にしていかなくてはならないという意識を持って、大島区達集落に伝わるお祭りを地域活性化イベントとしてプロデュースしている。小学校も総合的な学習で地域のイベントへの参加を行っている。しかしながら、個別となると、自分の活動もあり、なかなか行えないという声も聞く。子どもたちはこれから社会と繋がっていくので、地域の活動に進んで参加することを大切にしていきたい。

飯田委員：　出番という言葉が少し抽象的であると感じた。イメージとしては分かるが、違和感がある。役割という言葉であればしっくりくる。

近所付き合いをしたり、地域の活動に参加したりすることは理想だと思うが、出たくないという意見も尊重しなければならないと思う。第6次総合計画では、「自分らしく」という言葉が入っているので、そういった考えも尊重できたと思うが、今回の案にはそういった言

葉が無くなっている。「その人らしく」という言葉があった方が良いのではないか。

中村委員：　基本理念としてはこういうことだろうと思う。他の委員の意見を聞いて、基本理念の「すこやかに」の後に「自分らしく」という言葉を入れても良いのではないか。

仲田委員から意見が出ていたが、近所付き合いの理想と現実にギャップがあることについては、分析が必要だと考える。

小杉委員：　地域福祉計画と他の計画（総合計画や障害者福祉計画等）との関係性はどうなっているのか、よく分からない。

また、社会からの孤立を防ぐための体制づくり、出番の創出、生活を支える基盤づくり、地域で支え合う体制づくりについては、今後市で検討するのだと思うが、全体として具体性がないと感じた。

山川委員：　出番という言葉は分かりづらい。役割といった方が分かりやすい。どんな人であっても、生きているだけで役割はあるが、出番と言われると、出番なんて来ないのではないかと考えることもできる。

西澤委員：　基本理念としては良いと思うが、なぜ「出番」という言葉を選んだのか、市の考えを聞きたい。障害福祉の分野では、社会参加とか、社会に役割を持つと言うことが多い。

宮本委員：　資料の 3 ページに地域懇談会の開催が出てくるが、そこで出た地域の思いが基本理念等に反映されていると感じた。行政が作る計画ということで、理念や目標など少し抽象的になっているかと思う。社会福祉協議会では、これから地域福祉活動計画を策定することになるが、こちらはアクションプランであり、実効性のある計画を作っていくことになる。この計画の中でも、出番や役割といった言葉を入れる予定としている。例えば、子育て経験のある高齢者が子育て中の親に教えるとか、中学生がゴミ出しを手伝うとか、そういったことが地域の中での出番になってくると思う。

横尾委員：　高齢者福祉の分野では、「役割を持って」という言葉を使うことが多い。どういう出番を作るかよりも、地域における役割とした方がしっくりくるのではないか。

個人としては、助けてもらえる体制があることは良いと思う。また、子どもにとっては、近所に住んでいても知らない人という人が多いので、地域とかかわりを持っていかないといけないと感じた。

五十嵐委員：　地域の理想が書かれていると感じた。孤立してしまう人には、経済的に孤立してしまう人、身体に障害があり孤立してしまう人、家族から孤立してしまう人など、様々なケースがある。こうした個々の具体的なケースでの取組等を踏まえて、基本理念や基本目標が作られていると理解しやすいが、基本理念や基本目標から考えていくのはどうなのか。

資料では、市民の声アンケートの結果の抜粋が載っているが、アンケート結果全体についても教えてほしい。

井部副委員長：　理想的なことが書かれていて、個々に具体的に何をしていけばよいのかがよく分からない。

また、他の委員の意見にもあったとおり、近所付き合いの理想と現実にギャップがあることについては、分析が必要だと考える。

青木委員長：　（委員の皆さんと共に）一つ確認いただきたいのは、この計画は行政計画であって、市が何をするのか市民に宣言する計画であるということ。

地域福祉計画は、理念が先行して議論されているため、なかなか具体的な施策と結びつかず、どういう計画なのかイメージしづらい。

そのため、小杉委員からも指摘があったが、市の上位計画である第6 次総合計画や、地域福祉活動計画などとの関係性がよく分からなくなる。

また、地域の範囲がどこまでかという仲田委員の指摘は、大事な指摘であると思う。

少し分かりづらい表現もあるので、委員の皆さんから建設的な意見をいただき、良い計画としていきたいと思う。

委員長として一つの提案として、計画の中にできるだけ事例を入れていくと、読みやすくなり、こうしていきたいという思いが伝わるのではないか。例えば、岡山市の地域共生社会推進計画が参考にな

るので、ホームページ等でご覧いただきたい。

多くの委員から「出番」という表現に対し意見が出たが、事務局から発言はありますか。

八木部長：　地域は、向こう三軒両隣から始まり、町内会、小学校区、中学校区、市というように、様々な範囲がある。地域福祉計画における地域の範囲は、その時々で異なってくることから、場面ごとに読み手から解釈してもらうこととし、しっかり定義付けしない方が良いと考えている。

居場所と出番について様々な意見をいただいたが、事務局の中でも出番を活躍の場づくりにしたらどうかといった議論もあった。人によって言葉に対する解釈や想いは異なるので、こちらもしっかり定義付けせず、それぞれの場面ごとに解釈が異なってもよいのではないかと考えている。例えば、障害のある人は、居場所＝出番、存在＝居場所＝出番というふうになるかもしれない。放課後の子どもの居場所として、放課後児童クラブであったり、自宅であったり、遊び場でもあったりしても良いと考えている。

計画の関係性について言うと、市の最上位計画である第 6 次総合計画がある。その下に今回策定する地域福祉計画があり、その下に昨年度改定した健康増進計画や障害者福祉計画があると理解していただきたい。

中村委員：　私は出番という言葉がふさわしいと思っている。役割と言うと、全員何らかの役割はあると思うが、出番と言うと、そこに自主的な要素が入ってくると思う。私の中では出番と役割は違う。出番という言葉はこれから議論していく中で、大切な言葉だと考えている。

青木委員長：　全ての市民一人一人に分かりやすくといっても、一人一人捉え方は違う。

出番という表現を使ったことは新しいと感じている。表現として様々な意見があると思うが、委員長として預からせてもらって、副委員長、事務局と相談しながらどうするか決めたいと思うがよろしいか。

【異議なし】

近所付き合いの理想と現実にギャップがあることについて、委員会の中で議論したい。なぜこのようなギャップが生まれるのか、委員から意見をいただきたい。

仲田委員：　地域の中で自分が誰かを助ける場合、自分がそこで行動できるか、自分が誰かを助けることが地域の中で認められているかということがあると思う。いざという時には平常心で行動できないのではないか。

もう一つ、困っている人がいた場合、本当にその人に手を差し伸べてよいのかということがあるのではないか。相手の理解を得られるだろうか、断られることはないだろうかといった意識が市民の声アンケートの結果として現れているのではないか。

宮本委員：　長野県小布施市でアンケートを取った時に、目の前に困った人がいた時に助けますかという問いに対して、9 割以上の人が助けると回答していた。一方、自分が助けてほしい時に手を挙げることができるかという問いに対して、手を挙げることができる人は数％しかいなかった。

このことから、意識を持って行動してもらえるよう、意識づくりを進めていくことが大切だと考えている。

井部副委員長：　困った時に声を出せる状態になっていることが地域の理想だと思う。そういった地域を作っていくことが大事だと思う。

山川委員：　自分自身の経験として、声を掛けてくれる人は多かったが、助けられ方がよく分からないということがあった。また、困っているけど外に出ない人がいて、その人への声の掛け方が分からず、助けたいという気持ちがふさがってしまうということもあるかもしれない。

今は行政サービスを使い、制度を活用した方が近所の人に頼むよりも気が楽ということもあると思う。そうしたことからも、近所同士の助け合いは減ってきていると感じる。

青木委員長：　これまで国では自助を推進してきた。このため、「人に頼ることは恥」

という国民性が生まれ、その結果、どうしようもなくなってから、発見されるケースがある。この計画では、声を出しやすい地域づくりを目指していってもよいのではないかと思う。

仲田委員：　11 ページの「住民一人一人が自らの地域に思いや関心を持ちながら」とは具体的にどういうことを言っているのか。

12 ページに「福祉サービスを展開していく」とあるが、これは行政や事業所の目線であり、例えば、「福祉サービスの供給体制づくりを強化していく」といった住民目線の記載の方が良いのではないか。

青木委員長：　他にも、例えば、「居場所の確保」ではなく、「居場所づくり」といった方が柔らかく聞こえるといった文言もある。文言については、委員長、副委員長、事務局で相談しながら整理していく。

10 ページの 2 段落目で、「誰もが身近な地域で、すこやかに生活できるよう、地域とのつながりを築くことができるようなイベントへの参加や健康づくりに向けた自発的な取組などを促す」という部分と「自ら声をあげられない人や困りごとを抱えている人の悩みに気付き、支援につなげていくための体制づくりや取組を充実させ、社会から孤立することがなく安心して暮らせる地域を目指します」という部分は入れ替えた方が良いのではないか。

山川委員：　11 ページに「地域の皆さんとの連携が特に必要」と記載があるが、事業所や行政など、市全体で連携していくという意味の方が良いのではないか。

五十嵐委員：　住民は SOS をどこに発信すればよいのか、行政はその SOS をどう受け止めるのかが記載してあると良いと思う。

青木委員長：　事務局案については、おおむね了承してよろしいか。

【異議なし】

本日の委員会でいただいた意見は、できるだけ多く計画に反映させていきたい。

9　問合せ先

健康福祉部福祉課　　TEL：025-526-5111（内線 1146）

E-mail：fukusi@city.joetsu.lg.jp

10　その他

別添の会議資料もあわせてご覧ください。